

行司という役柄

藤原 道夫

相撲の放映は最後の3, 40分ほど見ることにしている。場所毎に番付が変わるし新顔も出てくるので、しこ名と顔が一致しない力士もいる。ファンというにはほど遠い。

TVを見ながら、行司役が気になりだした。装束が派手になり、目立つようになったせいか。仕草がどこことなく仰々しく、何を意味しているか分かりにくいところもある。彼らはどんな役柄なのだろう？ そんな素朴な疑問が膨らんできた。見ていて、また相撲辞典やインターネットで調べ、面白いと思ったことを以下に。

行司役はつまるところ相撲の進行をスムーズに行う役を負っている。

まず衣装は烏帽子をつけ直垂を着る。能装束に似ているが模様や色合いが違う。相撲では黄色やピンク、あるいは赤っぽい派手な衣装が目立つようになった。一見して新調したと思えるものもある。これは昇進した力士あるいは鼯負筋からの贈り物なのだろう。上位の行司は白足袋に草履を履く。

飾りも興味深い。胸と背中に組紐で作られた飾りを付けている行司もいる。その凝りようには感心するばかり。結びの一番を仕切る立行司をよく見ると、帯に短刀と印籠を挿している。それらに意味があるようだ。軍配に付いている房もなかなか凝っている。

行司の格好は制限時間内の仕切りの時がよい。右手に軍配をかざして左脚を伸ばしている姿は一幅の絵のよう。この姿勢と声の出し方が行司役の評価につながっているよう。

行司の最も重要な役は、東か西か勝った方にさっと軍配を揚げること。勝負を見極めるために見やすい位置にこまかく動く。ところが力士の動きについていけず、体当たりされて土俵の外に飛ばされることもある。勝負の判定が難しくとも軍配は揚げなくてはならない。審判役から物言いがつくと、親方5人が土俵に上がって協議する。ここに行司は加われない。協議は目視だけで行われるのだろうか。その判定は絶対だ、結果を待つ間の行司の気持ちは如何なものだろう。差し違えが多くなると、相撲協会に進退伺いを出すこともあるらしい。

相撲は古く神事に始まり、江戸時代末に形式がほぼ固まって現在に至った。神事が絡むと不思議な所作が出る。行司の姿、行動もその一環で、それが興味深さに繋がっている。